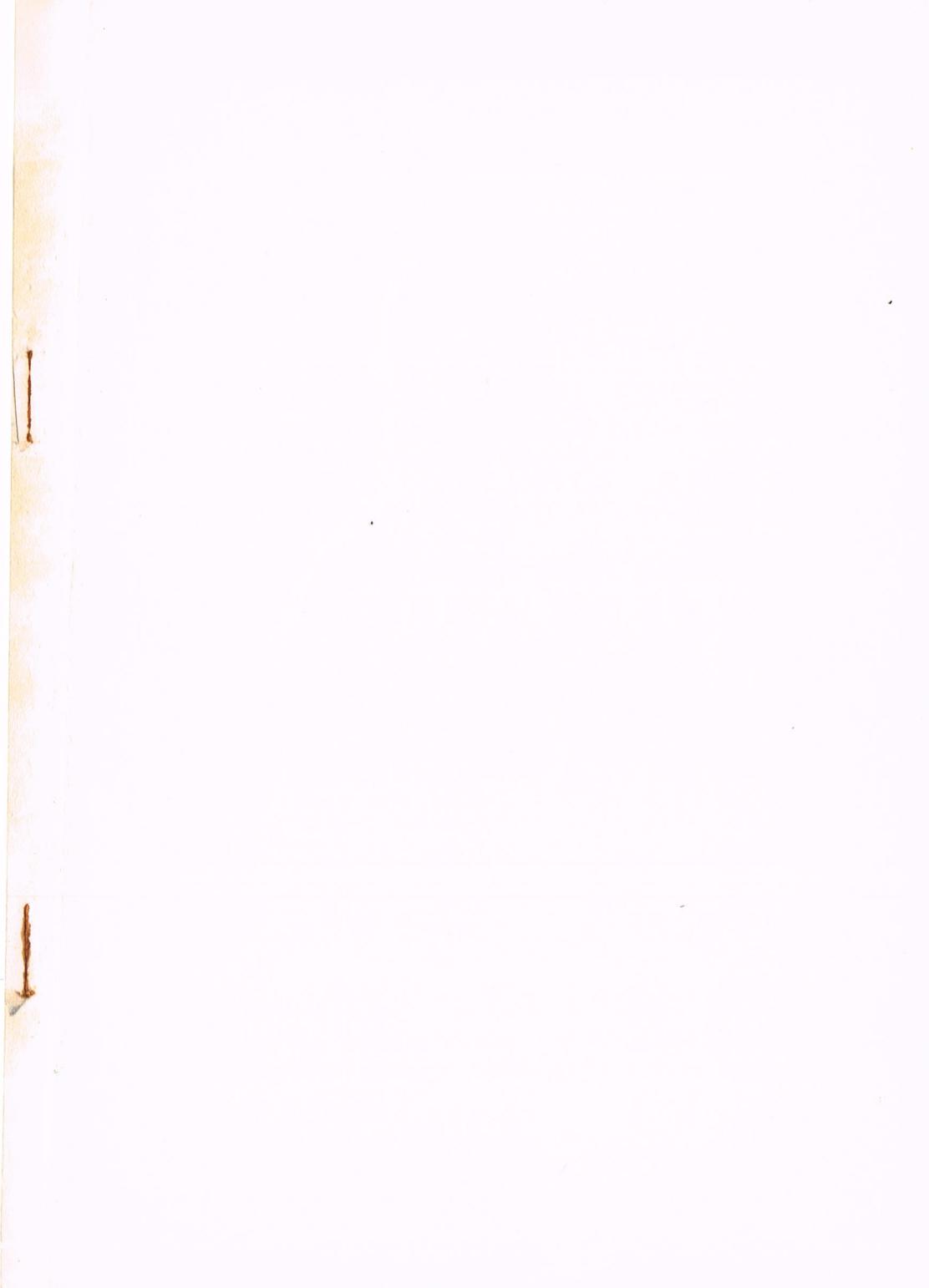


昭和三十七年四月三十日

郷土誌資料第4集

大和町のむかし
さうりしし舞と
はやし





左から 大じし 中じし 女じし



左から 大じし 中じし 女じし



大じし正面



大じし側面



中じし正面



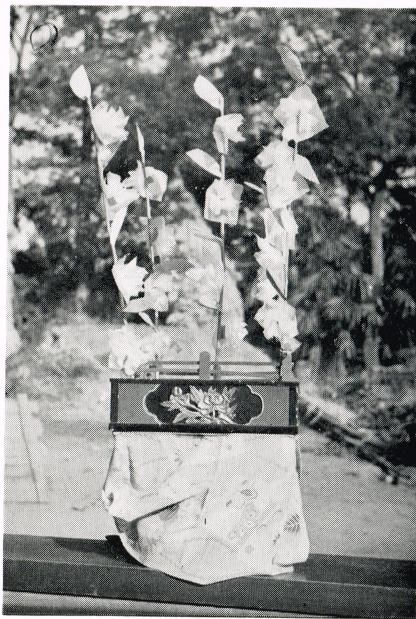
中じし側面



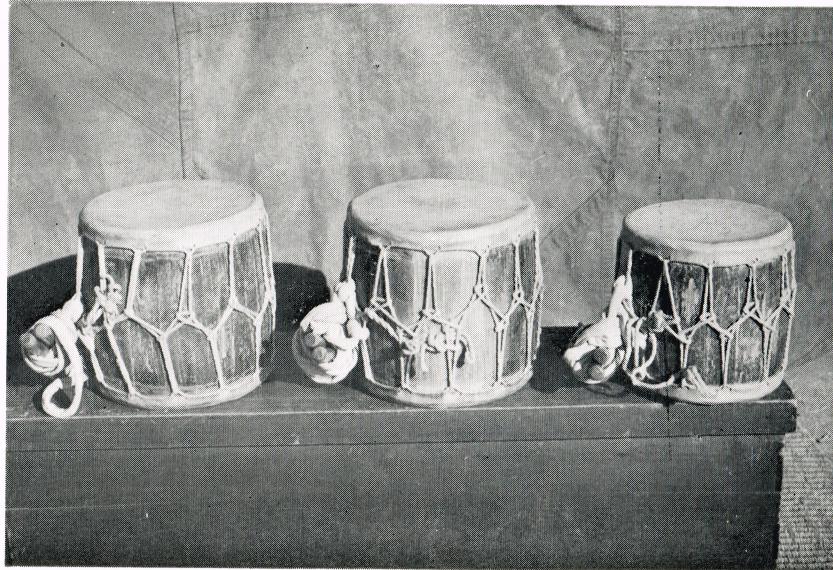
女じし正面



女じし側面



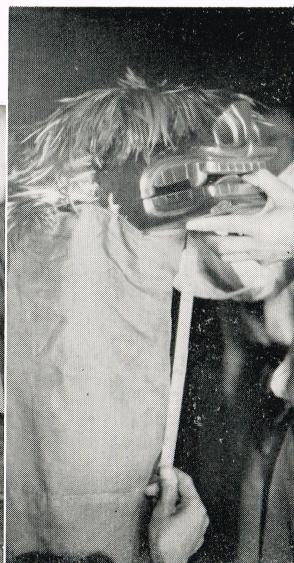
花 笠 (花は手製)



太鼓 左から 大じし 中じし 女じし用



中じしの測定



女じしの測定



調査員一団

序

わたくしたちの郷土大和町にある文化財を発見、発掘して、それを適正に保存し、更に進んで活用し、町民の皆さんの文化的向上に資するというのが大和町文化財保護審議委員会の目標であります。

ここに文化財と申しますのは

1 有形文化財

2 無形文化財

3 民俗資料

4 記念物

の四つを指しております。オ一集以来の三集は何れも記念物に関するものがありましたが、今回のオ四集は無形文化財についての調査をまとめたものであります。

無形文化財はそれを演ずる人が中心でありますから、それを後世に伝えるためには、その技術などを次代の人々に教えていただくより他ありません。これは時間的、労力的、経済的に容易なことではありません。

そこで、せめて文献として残すことのできる部分だけでもとの願いをかけて、県文化財委員の倉林正次先生のご指導を仰ぎ、この資料が完成されたのであります。先生のご懇情と、地元（下新倉三区自治会協和会、白子二区）の方々のご協力に感謝いたします。

昭和三十七年三月

教育長　金直亮

柳笛三十編三集

目

次

タの音韻は古樂韻の音韻と似てます。

歌詠歌の一ははじめに述べてあります。歌詠の記載語も、歌詠の不確証に對する歌詠解説、白玉(白刃)の式

子の式、二もしし舞の起源、三もゆきをる歌詠法等々の歌の歌には、歌文計博撰員の貴重な歌子歌

歌をうたふ。三もしし舞の行われる季節、四は舞間節、五は舞、六は舞の容易度とその難易度

舞歌文四種埼玉県内のしし舞小をあきらめます。子供は最初は歌うが大抵は、子の外れで、おれの入る所

ひつての間歌、1もしし舞の分布です。

○四の本詠上2もしし舞の形式面

3 大和町のしし舞の形式面

○五 大和町さらしし舞起源と沿革及びその実際(古老の談話を中心にして)

○六 1もしし舞のやり方

1 1 音 2 舞の内容の解説

2 2 舞の内容の用具

3 3 ささらしし舞の用具

ふの歌小詠4もしし神講の概略(古老の話を中心に)、5もしし神講の概略(記録を中心に)

あとがき あとがき あとがき あとがき あとがき あとがき あとがき

東

25 22 17 14 13 12 11 6 6 6 6 6 3

一、はじめ

郷土芸能が最近テレビ等に盛んに採上げられて、世の視聴を浴びると共に、その価値が正しく認められるようになつたことは、本当に喜ばしいことあります。

先人の文化を示す尊いものも、世の変遷、後継者の不足等の為めに次第にその影を薄くさせて來ていた際なので一層その感を深くします。

私たちの郷土大和町に「ささら・しし舞」のような貴重な文化財が、町の片隅に忘れられた存在になつてゐる状態にあることは大変残念なことであります。しかし先人の文化を示す貴重なものが現在にまで伝わつて來ているという点を考えますと、まことに私たちが誇りとし、大切にして行かなくてはならないことだと思います。

当町文化財保護審議委員会は、昭和三五・三六年の二回にわたつて、町の文化祭の郷土資料展は特に下新倉三区の自治会幹部と、しし舞の有志の方々の御理解と御協力により、会場に奉遷し、町民一般の方々に拝観していただいたのであります。

それに先だち九月末に当委員会ではかねての計画に基いて国学院大學講師で、埼玉県文化財委員の倉林正次先生を招いて、この「ささら・しし舞」について御指導をうけたので、その際の筆記や倉林先生の著書「芸能風土記埼玉県」をここに引用し、更に地元の古老のお話や地元にあつた文書等をまとめてこゝに記しました。

二、しし舞の起源

大和町の「しし舞」は言い伝えによると元亀三年（足利時代）ということになつていますが（後記）実は「しし舞」そのものは最古のものでも今から凡二五〇年位前に始つたもので、田楽系統のものであろうというのが定説のよう

あります。

これはもともと「祓い」の信仰から起り発達して今日に至つたと考えられます。〔神樂〕との関係が深く、東北地方ではしし頭を「かぐら」と呼んでいます。「神座」が「かむくら」、「かぐら」であり、神の座が移動するものとし、名古屋附近では「しし頭」を箱に入れて持ち歩くことが行われている地方があります。このことから考えますと、神樂もしし舞も同じ「祓い」の信仰によつて支えられたものであつたようあります。

「祓い」の信仰が「しし舞」の起源となつたことは、ししのような恐しい強力な神をうまく利用して、悪疫を払つてもらい、清めてもらうという考え方（いわゆる 毒をもつて毒を制する）によつて祝福と同時に悪魔払いをし、身の安全息災を祈つたものであります。祝福のことが出ましたが、これは舞の名称と形式によつて知ることができます。たとえば「橋掛け」といつて、橋を越え、「門掛け」となつて門に入り、更に「庭入り」となつて、庭で舞うといふような形式をふんでいるのがかなり多く見られることからもわかるのであります。尚特別なものの中に「座敷ざさら」又は「御殿ざさら」といつて、紋付、はかま、白たび姿で、むしろの上で舞うものもあります。いずれにしても遠くから神様が来られて、その土地の悪魔を払い、人々に祝福を与えていただくという信仰によつたものであります。次に「しし舞」の「しし」は、呼名はししといいますが、ししといつても獅子（ライオン）を意味するのではなく、とら・ぞうというような動物を考えたのでもなく、竜と同じような想像の動物を称したものであります。神前に供える「いけにえ」の動物の肉すなわち「しし」から更に変つて、神にささげる「いけにえの動物」をさす語になつたのであります。

舞そのものは、前にもちよつとふれましたが、田楽、念佛踊等古来の芸能の上に成立つて伝わつたものと思われます。

三、しし舞の行われる季節

秋祭の際とり行われるのが最も多いようですが、これは豊年を祝い、神様に感謝の意を表わすのであることは極めて常識的なことであります。信仰の遷り変りにより、夏行われるようになつた所があります。夏行われるようになつたのは、農作物中で最も重要と考えられている稻作にとって、夏の季節が極めて大切であり、また暑い頃が伝染病の流行期でもありますので、医学の進んでいない頃としては神に頼るより外なく、やがて来るであろうことが予想される災厄を払うために行うようになつたのであります。

大和町の「しし舞」が毎年三月十八日という春先に行われたのは、吹上観音内の八幡神社に厄除け祈願の奉納舞として、観音様の市日をあてて行われた、という極めて特別なものと考えられるのであります。このことについては後記の「ささらしの起源と沿革」「しし舞会記録」等に詳しく記されて居りますので参照せられたい。

四、埼玉県のしし舞

1 しし舞の分布

全國的にみると信州（長野県）を境として、

東は 一つのしし頭を一人でいただく一人だちが多く、

西は 一つのしし頭に二人以上は入る太神樂のようなものが多い。

また関東地方は、三頭だけ（一人で一つのしし頭をいただいた者が三人で舞う）が多いが、東北地方は四頭だけが多い、というように地方によりいろいろであります。

埼玉県内の分布表

月	北足立	入間	比企	秩父	児玉	大里	北埼	南埼	北葛	計
1	1	1	0	1	0	0	0	2	1	6
2	2	0	0	1	1	0	1	0	0	5
3	0	1	0	1	0	0	3	0	1	6
4	1	3	1	4	3	2	2	6	0	22
5	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
6	1	0	1	0	0	1	1	0	1	5
7	3	11	8	1	4	1	15	6	11	60
8	4	10	4	3	0	1	6	1	2	31
9	2	5	2	2	0	0	9	1	0	21
10	4	30	20	16	13	19	7	3	1	113
11	0	1	0	0	0	1	1	0	0	3
12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	20	62	36	29	21	25	45	19	17	274

12 跳しし舞の形式面

(1) しし頭の名称

対象 (1) しし頭の名称

A 大じし あります。別名の並みでいふとお前山舞るもじやぶく、手役で来るもじやぶく、

B 女じし さうです。北足立、北葛、南埼、比企の南部、入間の東部はこの形であります。ひ、まご屋の便益
中じじしまりますが、音頭の風り変わります。夏音は身るもじやぶくも西なあります。夏音は身るも
法眼じし うすめのひよきあらわせます。秋音は身るもじやぶくも西なあります。秋音は身るも
県の北部すなわち大里、北埼、児玉はこの形。

男じし 、」の舞の名である奉頭。

その内にもよく調べてみるとそれぞれ系統がある

ことがわかります。

埼玉県は関東地方でも、しし舞が多く全部では
二五〇位あります。

その内 大和町の属する北足立郡内には二〇位
あります。その他比企郡に三一、入間郡は特に
多く五〇個所位もあります。

C 女じし
男じし
先じし

太夫じし。
入間の山間部、秩父の東南部はこの形。
秩父一般はこの形が多い。

D 中じし
後じし
法眼じし

比企の一部にある形。

B A 女じし
中じし
法眼じし

本庄方面にある形。

D B 中じし
後じし
法眼じし

北葛、南埼の一部にある形。

C A 女じし
太夫じし
中じし

大別して右のように、A B C D の四つと、A B の混じつたもの、B D の混じつたもの、A C の混じつたもの の合せて七つの型になるようで、所変れば品變るのたとえの通りなのも興味を引くことあります。

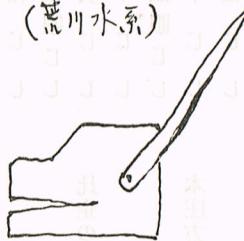
(2) しし頭の形式

人がそれぞれの郷土のしし舞だけを見ていた時は気がつきませんが、しし頭の型も大きく分けると次の二種になります。

ア しし形式（こまいぬ形式を含む）

しし頭の形式 (臥図)

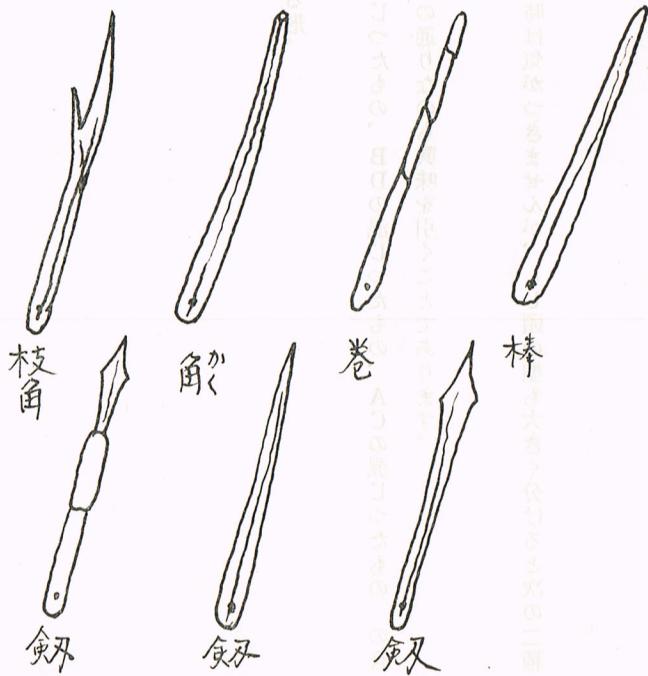
しし形式
(荒川水系)



龍形式
(利根川水系)



の
角
形



これは角が比較的短かく、鼻が低い（いわゆるししつ鼻はここから出たものではないかと思われます）のが特徴で、なかには秩父の三峰神社のししのように、しかの角のように出たものもあります。頭髪には長い毛を用いています。この形式のししは荒川水系に多く見られます。

イ 竜形式

これは角が長く、頭が偏平で、鼻が高いのが特徴で、頭髪には鳥の羽根（長いのは長尾鶲の尾を用いる）を用います。特に形が偏平な箱のようなところから重箱じしと呼ばれるものもあります。地域的に見るとこの形式のししは利根川水系に多く見られます。

ただし 角だけから見たのでは、地域的な特色はありません。

(3) ささらじし

しし舞をささらじしというのは舞の折に花がさの役が手にささらという、先を細かくさいた丸竹を、もうひとつ丸竹の三分の一ぐらいをけずり、それにこぎりのように歯をつけたものにすりつけて鳴らす楽器から出たものであります。いかにも素朴な感じの楽器ですが、ふえやたいこやかねが他のはやしや踊などたいていの場合に用いられるのと違い、ささらがしし舞の時だけに用いられたので、しし舞それ自体を「ささら」というようになつたと考えられるのであります。

(4) 角又は頭上にいただくもの、頭髪

角には、劍角、

棒角、

ねじり角（巻角ともいい、竜形式のししに用いる。）

女じしは、角がなくて、宝珠を頭にのせます。

頭髪によつて分けると次のようになる。

ア 鶏の羽根をつけたもの、

イ 動物の毛（馬の尾の毛）をつけたもの、

ウ 前二者を混合してつけたもの、

エ 女じしだけ毛をつけたもの、

(5) 舞う人の服装

ア じゅばん、ゆかたの上に上着をつける。なかには茶色地に黒格子の着物を着るところもあり、紋付を着る

ところもあります。

イ はかまは、

(1) 切ばかま

たつつけばかま の二種あるが、前記しし頭の形式によつて分類すると、

A・Cは 切ばかま

B・Dは 切つけばかま

といふように分けられます。

ウ はき物

最も一般的なものとしては、わらじが用いられていますが、

切ばかまの場合には、ぞうりを用いるのもあります。

一部には、はだしで舞う所もありますし、手甲、腰弊をつける所もあります。

(6) 曲目

ア 少数曲形式 一曲（一二切り）から二曲位であるもの、

ア、マイは多数曲形式一二二曲を中心にして曲の数の多いもの、
不齊曲、三曲形式、三つの曲で行うもの、これは大里郡、児玉郡など県北部に見られます。
さて尚舞曲の名称を見ると、共通したもののがかなりあるようと思われます。
以上の六つの形式面について、大和町のものについて考察しますと、

3、大和町のしし舞の形式面

古(1) しし頭の形式は、つゝお子の大蛇の舞や、舞
ハコス○A形（大じし、東女じし、中じし）大蛇の大蛇の舞や、舞
歌(2) しし頭の形式は、舞さすは以翁のよき思ははます。実村文信歌ふよきおもひ大蛇の舞のすすめ、不齊曲
ひまち○竜形式（角が長く、頭が偏平で鼻が高い。）なりの好舞を下す。西田のメモ「つづ歌」の義理詩云、中
歌(3) しし舞のよび名は「神力」あひてうらむむか思る西の「」舞、西田二十三季以頭の文書歌一闇歌もこの
う又歌○ささらしし舞、舞歌ありませ。

歌(4) ま角は、ののりお村舞士愛の舞甘く舞ひさみハコ舞太じか」おもひおおせめん、舞者らの文書歌も有
なり、○ねじり角（女じしは宝珠）舞の秋場舞はかまとの角であるか一箇所脇から出る脚廻があるのと、人間の脚筋も
歌(5) はかまとはき物は、つたも古く、つたも五つまのうだ、ほな舞の脚廻の高ひ度重なものうちあることか舞
矣。○切りばかりで、わらじをはく、

歌(6) 曲目の形式は、さゝりひぐれ、頭筋の古舞の水精や、頭筋大さかまくつたの脚廻を怪事らむ歌ひて有
體歌○少數曲形式で、例のつづ歌などのよい水精等、そのよい水精等、そのよい水精等、そのよい水精等
ということになり、県の中央部に多く見られる竜形式の代表的なものといふことができるのであります。

五、大和町さらしし舞の起源と沿革及びその実際（古老人の談話を中心にして）

前節に述べたことで、町のしし舞がどのような系統で、どのような形式かということは一応わかつたのですが、次に下新倉三区のもとについて、地元の古老人のお話や、記録などをもとにしてその起源や沿革などについて記します。

文化財と言うと、誰も少しでも古く、少しでも正しいもので、それが真に価値の高い貴重なものであることを願つたり、誇りとしたりするもので、信仰の対象物となるものであると一層神秘化される傾向があるのは、人情の自然と思われます。このことは郷土愛に結付く時いちがいに捨ててしまふことはできませんが、調査という立場から言うと又別な見方をしなければなりません。

元亀三年三月十八日（足利時代）ということになつて居る町のしし舞は、明治二十三年以前の文書が一切残つて居りませんので、歴史的にこれを証明することができないのは残念千萬です。前記のように「しし舞」の発生は江戸中期以降なので、このしし舞もそれ以後のものと思われます。実は文書類がもとはあつたようなのですが、下新倉村時代にその記録を預つて居た石田覚右エ門氏方の火炎の際、焼失したと伝えられています。

古老人のお話によりますと、ししはその火災の際幸にも焼失を免れ現在の仏の木に石田氏が隠居される折、一緒に奉遷し宿元になられたようであります。下新倉の吹上観音内八幡神社へ厄除け祈願の奉納舞として行わたるもので、明治二十三年以前までは下新倉全域のしし舞であつたと考えられます。

それ以後のことは記録（しし舞会記録、後出）ではつきりして居りますので談話と合せて記しますと、明治二十三年に下新倉三区（現在の協和会）が主体となつて、しし神会が結成され田中純平氏が初代会長になり存續をはかられました。それ以来しし舞は直接的には三区の人達の手にゆだねれ、他地区から補助金（金額は不明）が出されるような仕

組になつて継承されたのであります。

それ以後の幾変遷は後に記しますが、終戦後下新倉三区で中央工業株式会社の中にあつた社殿の払下げを受け、石田氏（現在宿元としてしし舞の一切を保管して居られる）の宅地内に特別に社屋を設け、ここに納めました（この社屋は石田氏宅東側道路沿いにあります）が、てんとう虫の巣にされたり、衣類の虫がついたり損傷が多いため、三年後の昭和二十三年に再び石田氏の住居内へ移して保管することになり今日に至つて居ります。その前昭和二年浅草某店に委託して、しし頭の塗替、羽根の取替を行つて居ます。

1 しし舞のやり方

前記の通り八幡神社奉納厄除けのため、例年三月十八日の吹上觀音の市日に行われたのであります。

当日になりますと、ししは宿元石田家を出て下新倉氷川神社にお参りして「手打ち式」を行い妙典寺門前を過ぎ、地太夫様前、（柳下廓次氏宅）、粧屋前（清水多平氏宅）を通つて吹上觀音に至る道順をとつて行進され、沿道は人垣をもつて埋められ青竹をもつて、ししの道中を警護し、今まで言う交通整理に汗を流す程であつた由でその盛んなようすが思いやられるのであります。

その道中を笛を中心記しますと、

(1) 出発（では）宿元を出発する時に奏する特別な笛の曲の名を示しますが、この笛を合図に隊伍を整えて、しずしげと威儀を正した人々にまもられて道中が始まるのであります。

(2) 道笛、笛頭以下十五人から二十人位の笛掛が一齊に奏する道中笛につれて四人の花笠につづいて、大じし、中じし、女じし、更にささら二人を中心以下しし神講社中の歴歴が羽織、はかまに威儀を正してつき従つて厳めしくも華やかな道中が繰りひろげられるのであります。

(3) 糜屋前、ここまで来ると、いよいよ舞の庭に入る前という意味、道中の終りを知らせる意味でしよう笛の吹き方

が違つた曲になりますがそれをトンドレネといつて居ります。

(4) 迎えの金棒、行列がいよいよ観音様に近づくと、観音様からは金棒をついた二人の者がお迎え役として行列にあ

いさつして先導し境内に入るやいなやお堂の前（八幡前の舞という）で舞が舞われるのであります。このように境内に入るやいなや舞うのはししの勇ましさの表現と考えられます。

(1) 出發（アガメ）す。以上の行列の様子を見る沿道の老若男女は、自ら信仰心を深め、老婆の手を合せて拝む姿に、好奇の眼を輝かせてたれる鼻汁をぬぐうのも忘れて見入る童の心に、郷土の祭事が強く刻み込まれ、やがては愛郷心にまで伸びて行つたであろうことが思われるのであります。

此太夫船頭、
静まりてきりっと拍子をごらんなれ、あまりなるにはうたがよまれる。

2 舞の内容の解説

しし舞が始まる頃から觀音様の境内は押すな押すなの人出で、舞の庭として、青竹の先を割つてつないだ十畳程の広さのささら割りとよぶ場所を作り、その中で舞うのです。無事に到着し舞いすむとしはそのまま東明寺のお庭でもう一度舞いお寺からお茶が出され休憩ということになります。

(1) めじし、まず最初に行われるのがこの舞で、めじしが独り舞をいたします。

(2) 中じし、しばらくすると、中じしが出て来て、二頭が一緒に舞います。その内めじしが中じしに愛情を示す所

で大じしが出て来ます。

(3) うたぶえ、その時になると笛が「うたぶえ」という曲に變ります。

(4) うた、ついでうたがはりますがそのうたは、

歌詞は「中央工業科大学の中央ひだり太鼓隊の歌」です。

この歌の声を聞くと取囲んでいた観衆のざわめきが一瞬静まります。静まつたところで

(5) 大じし、大じしの乱舞がクローズアップされます。

観衆はその勇壮な躍動に大きな威圧を感じつつも心を奪われ、手を握りしめ、こわばった表情で見入って居るのであります。高い調子の笛の音さえも耳に、は入らないようです。

次いで

(6) うたぶえ、ここで再び、笛が「うたぶえ」となります。

うた、ここは「○○」(その土地の名)さかる都の庭なれば、あそびながらも心うれしや。
緊急しきつていた人も「ホツ」とひと息いれた形でうたに聞入るところです。

(7) すごもり、中じしが女じしをかばつて静かに動く、一方大じしは大きな荒荒しい動作で威力を示しつつ、めじしを追かけます。ややあって三頭のししが舞つかれて参ります。

(8) 花 笠、今まで舞台の外圍にいた四人の花笠が、ここで舞の庭に進みます。すると三頭のししは花笠の間をぬつて、あるいはそのかげにかくれ、また出たりして、女じしを中心二頭の男のししがそのとり合いをすることを示すおいの舞をいたします。

初め女じしを得ていた中じしも大じしの挑戦をうけて、俄然奮い立ち互に相手を倒そうと争う舞のさまは観衆に一喜一憂を感じさせると共にその勇ましさは観衆の心を奮い立たさないではおきません。しばらく舞がつづいて舞いつかれた所で

(9) ししのうた、「たいこの胴をきりりとしめてささらをさつてたち舞わないよ」

(10) 仕上げしのうた、「唐からくだつた唐絵のびょうぶたつた一つでたちまわれぬよ。」

という所で、さしも観衆の心を奪つたしし舞も終り、笛、花笠、しし、は列を整えて控所へと引揚げるのであります。

しかし舞が終るとさしもの人出も一時に、潮の引くように去つていったといわれていますが、ともかく、三月十八日觀音市の大景物であつたことは、想像にかたくないのです。こうした信仰に支えられ、郷土愛と伝統に輝く行事も昭和十三年までは続けられて來たのでしたが、東亜の風雲が急を告げ国内の情勢が急激に変り、軍国調が次第に高まり若い人々が次々に軍の庭に立つようになつたので、後継者に人を得られず、ついにとだえてしまつたことは、本当に惜しいでもあります。と申しましても当時を思えば、誠に止むを得ないことだつとしか考えられません。

お詫びせます。誤りで失礼しました。

(7) すつきり、中刀口を攻はる。宝刀をひき、大刀を抜き、一式大刀「歎天」の腰带を脱はざなつた。必殺の

必殺「もぐり」を入人さ「なや」る心も忍みぬ太刀を抜いて、其の間入るもござります。

そ、そ、そ、この如「〇〇」(その上級の名)も必ず勝の胸ふれ、必ずや必定さきゆで此ノ手。

(8) そのまま、もうお詫び、前段「お詫び」も承ります。

大ひび

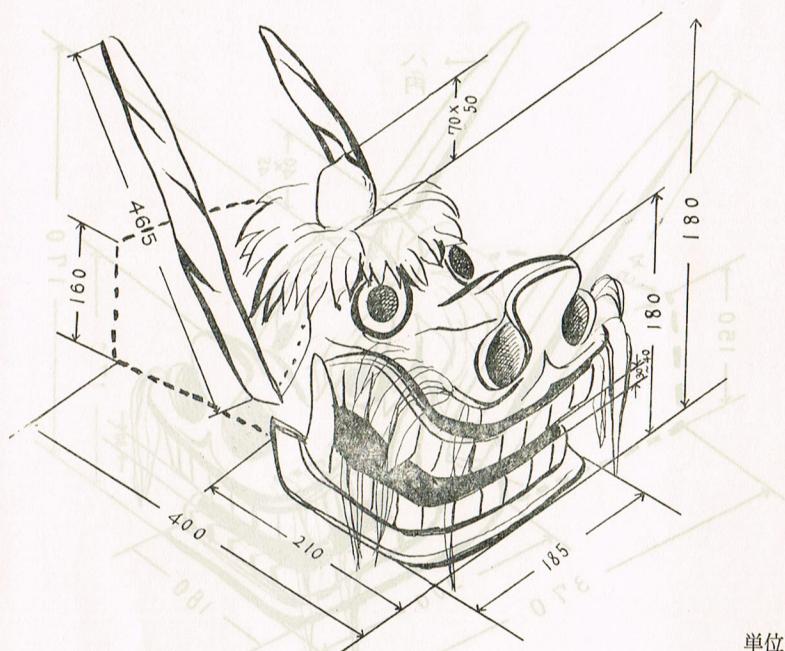
あがます。萬の難手ひ道のうちお詫び、迷惑を致ります。

難手ひ道の難手ひ道のうちお詫び、迷惑を致します。モモ野口の御子、モモ野口の御子、モモ野口の御子

(9) 大ひび、大ひびの詰解をローブでややお詫びます。

その難の風き御うる延辺みづほ云屬別のちがいも心一難情本ります。然まむおひびの

中
大
じし



単位はmm

(1)

ア 大じし

獅子面の大きさ

○角 卷づの 長さ 四六・五 cmcm

○水引 (頭の下に下げる布、黒羽(二重))

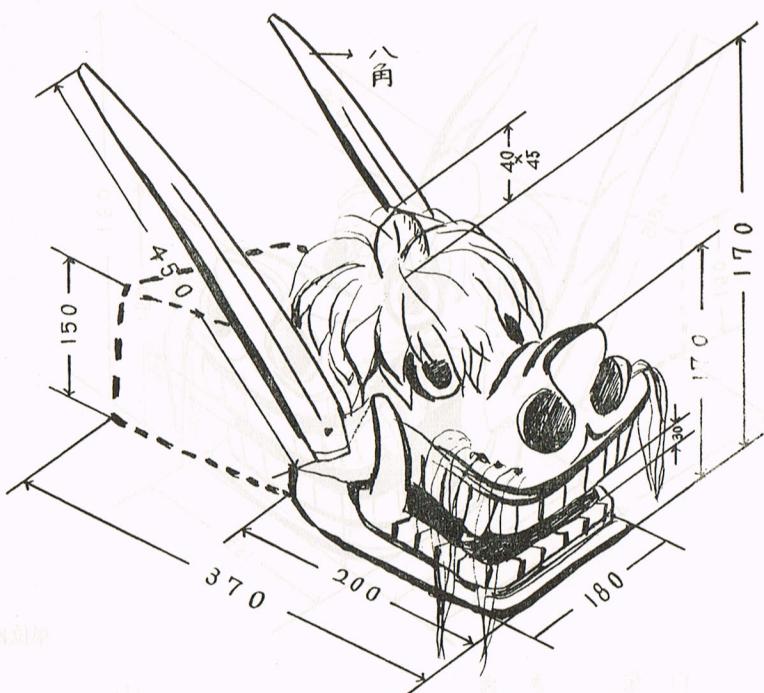
はばて 一 M
一・八 M

竜形式、矩形、黒塗り、歯、目、宝珠は金ばく塗
歯ぐき、鼻すじ、目のくま朱塗、赤色の舌、大きな
きば。

頭の頂に宝珠、頭の周囲を茶褐色の鶏毛で包み、
朱のねじり角、頭髪の黒い長い鳥の羽根、口ひげは
白色の毛、舞子の頭を入れるざる鉢。

ささらしし舞の用具

中
じ
し



イ
中
じ
し

角
かくすの
(八角)

長
さ
四
五
cm

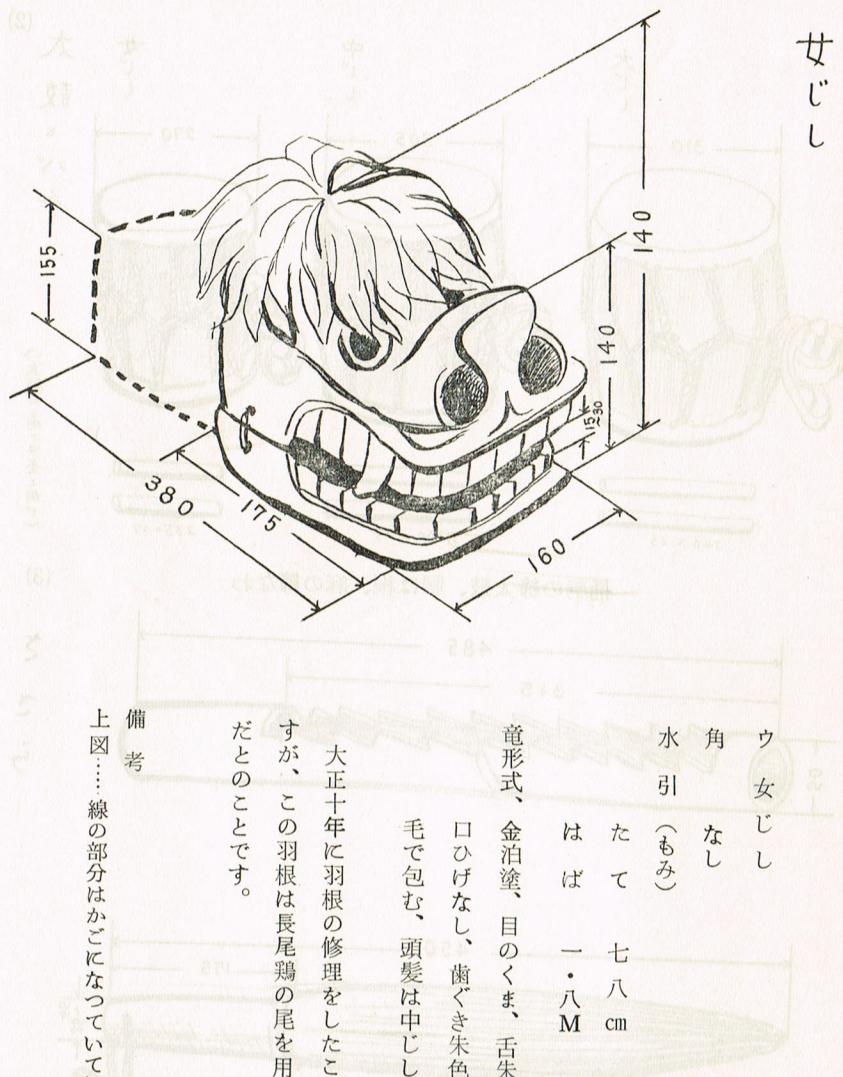
水
引
(黒羽二重)

は
ば
一
・
八
M

竜形式、矩形、朱塗、歯、目、宝珠は金色
歯ぐき朱、鼻すじ黒、目のくまなし、赤の舌
大きなきば。(左は欠損)頭の頂に宝珠、赤
褐色の羽毛で頭を包む。朱色の角は八角剣、
頭髪は黒の長い羽根、白の口ひげ、ざる鉢。

あるものと異なる用具

女じし



ウ 女じし

水引
(もみ)

角なし

たて七八cm

はば一・八M

竜形式、金泊塗、目のくま、舌朱色、きば、宝珠角
口ひげなし、歯ぐき朱色、周り茶褐色の羽
毛で包む、頭髪は中じしと同じ。

大正十年に羽根の修理をしたことが記録にあります
が、この羽根は長尾鶲の尾を用いるので相当高価
だとのことです。

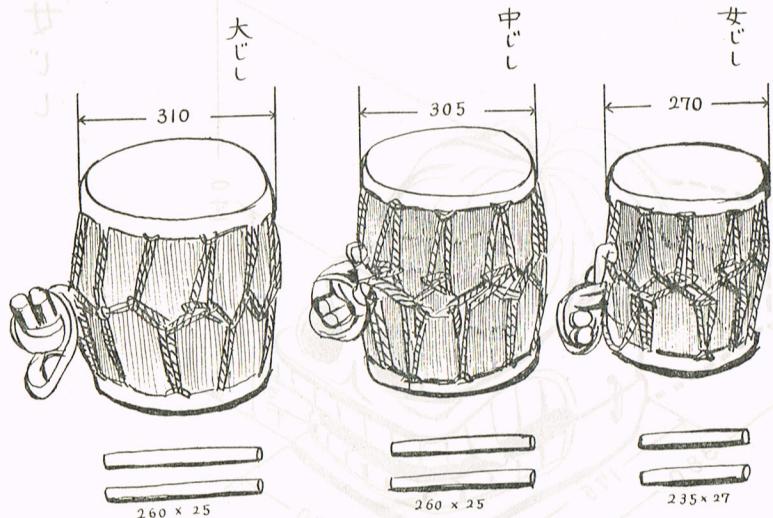
備考

上図……線の部分はかごになつていて舞子が頭を入れる。

(2)

太鼓
と
バナ

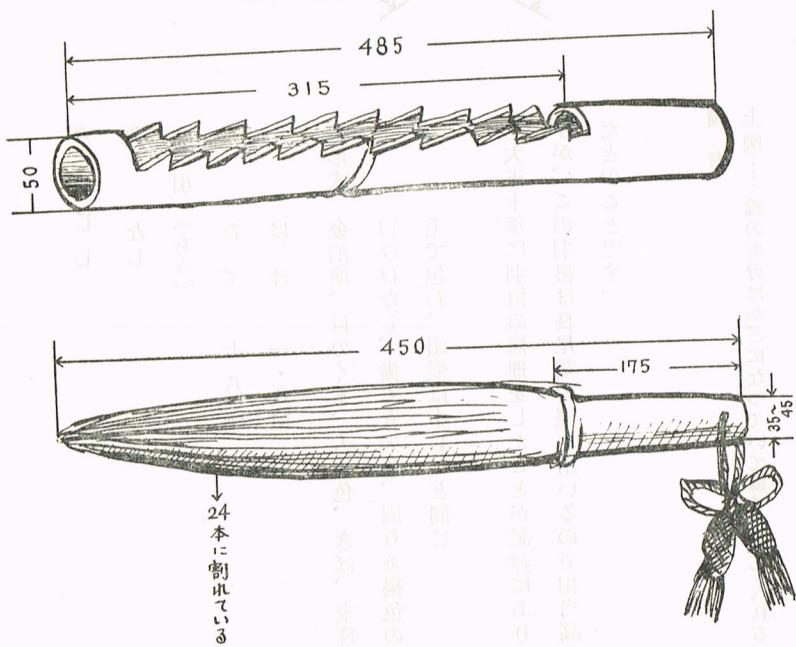
(太鼓の高さは鼓と同じ)



桶胴の締太鼓、胴は桐、麻の締なわ

(3)

ささら



(4) 桃内丁度食櫻御櫻
花がさ

桜の花束を出さず、古文書院の重慶が贈り果てこも知らずすまづありません。 ぎぼし付の柱
四本
「」咲櫻の紫御(古事の風)よ
さかの風

朱ぬり
木彫ぼたん模様四面
らんかん形
ぎぼしなし柱
四本

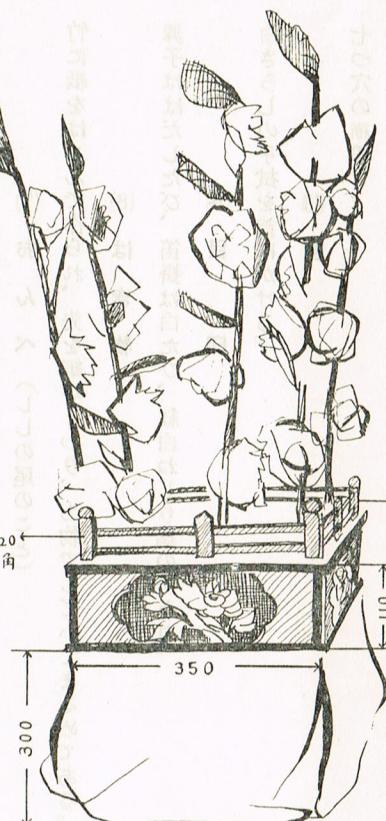
ふちどりはうるし 他は朱ぬり、ぼ
たん模様の側は金箔ぼたんつき。

花はひご二尺四花、四葉五本立。

花笠の掛はこれを頭にかぶり、台
ひもをあごの下に結び固定させ、舞
の庭に出るのでですがその時前面のた
れ幕を上げて、前方を見ることがで
きるようにします。 窓も閉、表の入障、井笠界、背の入障。

(5) 花 / 井笠界四脚、玉頭不開

花笠につける花は会員が古式によつて手作りします。 花は白い薄紙数まい重ねふちを赤色に着色し中央にこよりを
通したもので、葉は緑色の色紙を丸いおはし位の棒に巻付け、押しちじめてひだをつけて作る。 話によりますと桜を
形どつたものと言われています。 その花と葉をくじら尺一尺八寸五分(七〇〇cm)のひごに、紙をまきつけながら取り
つけて作ります。 例、春の、秋の、初夏の、ついに



(6) きもの、はかま、しごき

ア きもの舞子用 木綿地三着あり、（他に古いもの三着あり）
イ きもの花笠用 木綿地四着あり、

古いものは嘉永年間のものと推定されますが、新しいものは昭和八年のものであります。
ウ はかま舞子用 三着、花笠用四着、生地不明

エ し ご き 舞子用、赤の人絹、花笠用、青の人絹。

しごきの用い方は、二巻きして右へたらし、はかま下から右に出るようとする。
(7) おんべ（ししの尾のこと）

竹に紙をはさんで作られ、先を細かくわり、刃物でしごいてまるめてある。

(8) は き 物

舞子ははだしたび、笛掛は白たび、紅白ねじり緒のぞうり。

(9) 目 印

白さらしの手拭を首にかける。

(10) 笛

七つ穴の横笛。

4 しし神講の概略（古老の話を中心に）

文化財の調査に当り、古文書類が重要な役割を果すことは申すまでもありません。本町のしし舞については前にも
書れましたが、町内下新倉橋垣新七氏方に保管されていました「獅子神講記録」を見せていただくことができ、大い

に喜び心強く感じたのであります。これによりますと、その頃のしし舞の組織や運営や変遷が大層くわしく記載されて居りますので、町のむかしを知る上に大変貴重なものが得られたのであります。そこで記録のうち主なもののが抜書きと、古老の話と合せ記して、昔をしのんで頂きたいと思ひます。

(1) 創立 一応明治二十三年に創立され、初代会長に田中甚平氏が任命され約二十年間勤続されたと言われています。

(2) 組織

ア 会長

イ 幹事 笛頭(正・副) 炊事長 宿元幹事 舞子代表(大じしが代表して参加)

ウ 会員 下新倉三区内の各戸の長男で、数え年十七才から満四十五才までの者が会員となる。

但幹部は年令に制限なし。

エ 入会 三区内の長男が十七才になると神酒一升(一、八リットル)を供えて会員として仲間入りを許され、会員となる。

註 会長は会の総括をし、会を代表することは、わかりますが、幹事は会の運営の実際面を担当したようではあります。幹事の筆頭に笛頭が挙げられているのは、舞の進行その他が笛によってリードされている点から考えられることで、同時に連中責任者であるという点は、興味深いことであります。

(3) 会の維持費 江戸時代から終戦直後に行われた農地開放になるまでは、獅子免といつて八畝(七九三平方M)の田が下新倉六反地内に定められてあり、そこから収穫される米の収入と、下新倉一区、二区、四区からの維持金をもつてあてて居りましたが、その後部落に移管されてからは部落会長が責任者とな

(4) 練習

り管理されておりました。毎日おもひがき、その審査者用通道を経て「お詫び室」へと移動する。そこで練習場所は、お詫び室の隣接する「お詫び室」の内側にあります。

（5） お詫び室
練習期間は約一ヶ月を要したのですが、その間すべて宿元で行い、封建時代からの伝統的な色彩が濃く、階級意識を実にはつきり見せていました。例えば新入りの四、五年間は土間に居つて雑役としての勤務を受持たされていました。具体的には、飯たき、にぎりめし作り、使走り、接待のお茶くみなどの雑事だけだつたのです。

（6） 入会
三次に観音様で舞う数日前の日程を見ますと左のようです。

三月十五日 勢ぞろい

三月十七日 おみくじ 準備花作り、舞子、笛の練習。宿内十日もあらずの晩に公演へ昇進を休む。

今宵奉事 三月十八日 当日。宿泊準備 舞子片火（火事）ハカラタフアモニ

三月十九日 片附け。

（7） 賠償

食料は前に記したように「しし免」の田から収納される米を充てましたが、四日間の練習でやや餘る程度で、自給自足できたのです。

（8） 練習
新しい舞子の練習は正月の農閑期を利用して行いましたが、宿元の石田氏方では大変です。一ヶ月の練習の期間は、母屋をあけて、家族はみな物置へうつって寝泊りしたのだそうです。

（9） 練習
お詫び室へ運び入れる舞子の衣装は、そのうち端唄のみはまだまじめな財布が付いていたので、お詫び室へ運び入れる舞子の衣装は、そのうち端唄のみはまだまじめな財布が付いていたので、お詫び室へ運び入れる舞子の衣装は、そのうち端唄のみはまだまじめな財布が付いていたので、

5 しし神講の概要(記録を中心)に)

獅子神会記録の書抜き

この記録の書抜きに当つては、徒うに長くならない範囲でなるべく原本に近いものにするよう努めました。

1 記録、覚などは、そのまま写しました。

2 記名欄の採録に当つては、

① 変遷を示す摸式的な個所は省略しないようにしました。

② 一人の項に役名が二つ以上あるものについては、

役の名の違うことに記しました。

このことによつて封建社会の階級を尊んだ仕組み、考

え方をうかがうことができておもしろいと思います。

③ 現存者はなるべく載せるよう努力しましたが、

紙面の都合で載らない方もあると思ひますがお許し願いたいものです。

④ 氏名の上に○印を附したのは現存者です。

⑤ 明かに誤字と思われるものは正しい字に書き直し、わきに、を附けました。

1 表紙

明治廿六年三月十八日

獅子神会 記録
幹事記之

この表紙によると明治二十六年とあるのは、古老の話

によると、獅子神会は明治二十三年に下新倉三区に結成されたとなっています。

2 規約 獅子規約

総則

オ 一 条 獅子会ハ旧記ノ通り毎年三月十八日〇以テ定

日トシ其世話宿ハ累代ノ因襲ニ基キ本村オ三

区九十七番地石田鍬太郎宅ト定ム。

但定日ハ雨天順延世話宿ハ非常ノ際ニ非サ

レハ変更スル事ヲ得ス。

オ 二 条 獅子会ハ本村オ三区中字宮ノ脇谷中ノ両組ニ

各三名ノ幹事ヲ置クモノトス。

但幹事ハ無任期トシ不得止事故アルニ非サ

レハ改撰スル事ヲ得ズ。

オ 三 条 幹事ハ獅子会一切ノ事務ヲ總理シ且獅子連中

ノ風紀ヲ監督スルモノトス。

オ 四 条 獅子連ハ獅子舞三名 花笠四名 笛方無

定員ヨリ組織ス。

獅子連ニ正副笛頭各一名ヲ置キ連中一同ヲ統率スルモノトス。

但任期ハ無期限トス。

才六条

連中ニ欠員アルトキハ笛頭ハ直ニ推撰ノ手続ヲナシ且連中ヲシテ練習ノ義務ヲ尽サシムルモノトス。

才七条

練習ニ関スル費用ハ笛頭ノ請求ニ由リ幹事ニ於テ担任スルモノトス。

才八条

獅子会仿キ方ハ才三区ヲ兩分シ年々交代ヲ以テ勤ムルモノトス。

但幹事ハ毎年總出ノ事。

明治三十六年三月 確定候者也

幹 事 田 中 兼 吉

除 名 田 銚 太 郎

除 名 田 中 権 右エ門

除 名 田 団 藏

除 名 田 中 新 八

宿元幹事 田 弥 市

笛 頭 田 銚 太 郎

副 事 田 奥 太 郎

獅子連中記名 吉 田 奥 太 郎

笛 掛

明治四十一年三月十八日獅子新規練習ノ上譲渡ス。

吉 田 弥 市
田 中 七五郎
田 中 幸 太 郎

転 任

吉 田 奥 太 郎

田 中 幸 太 郎

茂 平

平 作

田 中 七五郎

幸 太 郎

田 中 市兵衛

甚 五 郎

田 中 茂兵衛

文 五 郎

柳 下 岩 五 郎

獅 子 舞

明治廿六年ヨリ全四十年度迄廿二年間勤続年三月十八日獅子新規練習ノ上譲渡ス。

明治十九年ヨリ全四十年度迄廿二年間勤続年三月十八日獅子新規練習ノ上譲渡ス。

明治二十六ヨリ全四十年迄十五ヶ年間勤続年三月十八日獅子新規練習ノ上譲渡ス。

明治三十六年ヨリ全四十年度迄廿二年間勤続年三月十八日獅子新規練習ノ上譲渡ス。

明治四十一年ヨリ全四十年度迄廿二年間勤続年三月十八日獅子新規練習ノ上譲渡ス。

明治四十二年ヨリ全四十年度迄廿二年間勤続年三月十八日獅子新規練習ノ上譲渡ス。

明治四十三年ヨリ全四十年度迄廿二年間勤続年三月十八日獅子新規練習ノ上譲渡ス。

明治四十四年ヨリ全四十年度迄廿二年間勤続年三月十八日獅子新規練習ノ上譲渡ス。

明治四十五年ヨリ全四十年度迄廿二年間勤続年三月十八日獅子新規練習ノ上譲渡ス。

明治四十六年ヨリ全四十年度迄廿二年間勤続年三月十八日獅子新規練習ノ上譲渡ス。

明治四十七年ヨリ全四十年度迄廿二年間勤続年三月十八日獅子新規練習ノ上譲渡ス。

明治四十八年ヨリ全四十年度迄廿二年間勤続年三月十八日獅子新規練習ノ上譲渡ス。

明治四十九年ヨリ全四十年度迄廿二年間勤続年三月十八日獅子新規練習ノ上譲渡ス。

明治五十一年ヨリ全四十年度迄廿二年間勤続年三月十八日獅子新規練習ノ上譲渡ス。

明治五十一年ヨリ全四十年度迄廿二年間勤続年三月十八日獅子新規練習ノ上譲渡ス。

明治五十一年ヨリ全四十年度迄廿二年間勤続年三月十八日獅子新規練習ノ上譲渡ス。

明治五十一年ヨリ全四十年度迄廿二年間勤続年三月十八日獅子新規練習ノ上譲渡ス。

転 任

吉 田 奥 太 郎

田 中 豊 七

喜 平

吉 田 奥 太 郎

吉 田 奥 太 郎

吉 田 奥 太 郎

吉 田 奥 太 郎

吉 田 奥 太 郎

吉 田 奥 太 郎

韓國駐在中死亡

転任

計七名

連中後見

常設委員

幹事

元宿全

元笛全

元笛全

元笛全

元笛全

元笛全

元笛全

元笛全

元笛全

元笛全

姓名左二
明治四拾壹年三月獅子執行ヲ区内若衆持ト改メ其幹事

田吉田吉

田中田

吉田吉
中田中
武平純喜
平七平一

深山田井藤太郎
中田宇治三吉
源平七

掛長	炊事	花笠	獅子舞	轉無効	全笛副笛	宿元幹事	大山六助石田
石安	安山	深深	田吉	○深吉	田吉	田中	新太郎
田田	田崎	井挂	中田宮舞	中助右工門	中田倉造	喜平	喜平
一長	太郎	伝兵工幸	吉平五郎	仁兵衛	満三	新太郎	石田
良		造	源平一七				
田田	○田	○山	吉山田	安稻吉	田田田		良
中中中		中崎	田崎中	田垣田	中中中		武次
由五郎	栄鉄一造	秀吉	平宇常吉	市兵工平次郎	惣良次	新之助	

明治四十三年三月十八日連中加入

○田 中 新 平吉

○深 井 茂 吉

明治四十二年三月十八日加入

○田 中 荘 造

一金七円六拾錢
明治四十二年三月十五日大中獅子水曳新調

伊勢庄呉服店へ注文

山 田

岩次郎

○田 中 政 吉

深 井

竜 平

全 四拾三年三月六日獅子三頭並ニ花笠、ササラ等全
部塗換ス

一金武拾九円也

北足立郡蕨町神仏師

幹 事 中 獅 子

明治四十一年三月ヨリ
大正拾五年三月ヨリ

吉 田 喜 一

幹 事 吉 田 明治四十一年三月ヨリ大正五年三月満期

正笛頭 吉 田 喜 良 次

幹 事 長

明治四十一年三月ヨリ
大正拾五年ヨリ勤続ス

田 中 純 平

正笛頭 吉 田 喜 平

幹 事 長

明治四十一年三月ヨリ
大正拾五年ヨリ勤続ス

田 中 純 平

正笛頭 吉 田 喜 平

幹 事 長

明治四十一年三月ヨリ
大正拾五年ヨリ勤続ス

田 中 純 平

正笛頭 吉 田 喜 平

幹 事 長

明治四十一年三月ヨリ
大正拾五年ヨリ勤続ス

田 中 純 平

正笛頭 吉 田 喜 平

幹 事 長

明治四十一年三月ヨリ
(全前)

田 中 純 平

正笛頭 吉 田 喜 平

幹 事 長

明治五十年ヨリ編入ス
大正五年ヨリ勤続ス

田 中 純 平

正笛頭 吉 田 喜 平

幹 事 長

明治四十年三月ヨリ
大正五年ヨリ勤続ス

田 中 純 平

正笛頭 吉 田 喜 平

幹 事 長

明治四十年三月ヨリ
大正五年ヨリ勤続ス

田 中 純 平

正笛頭 吉 田 喜 平

後見 大正拾五年三月ヨリ

田 中 武 平

田 中 平

覚

山田 岩次郎

幹事長

昭和七年三月ヨリ
○稻垣 新七

笛掛

大正九年三月加入

正笛頭

大正十五年三月ヨリ

笛頭

昭和九年三月転居依願除名ス
吉田松藏

藏

中略
炊事掛
笛頭
幹事掛

中略
花笠掛
中獅子

大正二年三月加入
大正六年三月編入十四年迄勤続
○田中莊造

石田重次郎

中略
炊事掛
女獅子

大正十年三月加入
大正十五年三月ヨリ
○小宮安次

笛頭

次

中略
炊事掛
笛頭

明治四十三年三月加入
大正六年三月ヨリ編入
大正十五年三月ヨリ

○深井茂吉

中略
炊事掛
中獅子

大正十四年三月加入
大正十五年三月ヨリ
○田中幸平

笛頭

次

中略
炊事掛
笛頭

大正八年三月加入
大正十五年三月ヨリ

○石田松藏

中略
炊事掛
中獅子

大正十二年三月加入
大正十五年三月ヨリ
○田中安居太郎

笛頭

次

中略
炊事掛
笛頭

大正八年三月加入
大正十五年三月ヨリ

○石田松藏

中略
後略

大正十二年三月加入
大正十五年三月ヨリ
○田中安居太郎

笛頭

次

中略
炊事掛
笛頭

大正八年三月加入
大正十五年三月ヨリ

○石田松藏

中略
後略

大正十二年三月加入
大正十五年三月ヨリ
○田中安居太郎

笛頭

次

中略
炊事掛
笛頭

大正八年三月加入
大正十五年三月ヨリ

○石田松藏

中略
後略

大正十二年三月加入
大正十五年三月ヨリ
○田中安居太郎

笛頭

次

一獅子着用御袴二式

明治二十三年三月新調

大正七年兄市兵工君死亡ノ為引継

次

吹上 柳下源太郎寄附

神田商店ヨリ買入ル

一獅子御水曳新調

明治三十二年三月十八日

東京本郷 伊勢庄調

一金拾五円三拾錢

御羽子代

尺五寸 極長尾百本拾円也

一明治三十七八両年度日露戦役ノ為獅子祭事執行ヲ休止
セリ

一金六円也

明治参拾九年度ヨリ福田山ヨリ獅子連中

二年々寄附ノ事ト定メラル

明治四十一年度ヨリ定例

一金武円也 外御神酒壹升

柳下伊平太

柳下源太郎 柳下弁太郎

一金九円也

大正九年度ヨリ福田山ノ寄附金 物価騰

貴ノ為メ増加セラル

獅子神会ノ改革

役員一同

覺

大正拾年参月

獅子祭事執行前宿元石田武君ノ妻出産

セラレ為メニ鎮守社務所借受ケ挙行ス

大正拾年三月十五日大中女獅子御水曳新調
一金拾七円八拾錢也 府下成増新田宿

原田呉服店へ注文

この間一枚破棄してある。

大正十年三月十二日 東京市下谷区上車坂一番地

大正拾四年三月十八日

大正拾年三月十五日大中女獅子御水曳新調
一金拾七円八拾錢也 府下成増新田宿

大正拾年三月十五日大中女獅子御水曳新調
一金拾七円八拾錢也 府下成増新田宿

原田呉服店へ注文

大正拾四年三月十八日

大正十一年度獅子執行当日ヨリ連中一同ノ義務年限満
五ヶ年間延長ス

十七才ヨリ満四拾五才マデトス

覚

修理人 小宮源七

中内訳 尺二寸
ミノ毛 売束 拾錢也

中内訳 尺二寸
三百〇六本五円廿錢也

一金九円也

柳下伊平太 柳下源太郎 柳下弁太郎

獅子神会ノ改革

役員一同

覺

大正拾年参月

獅子祭事執行前宿元石田武君ノ妻出産

セラレ為メニ鎮守社務所借受ケ挙行ス

大正拾年三月十五日大中女獅子御水曳新調
一金拾七円八拾錢也 府下成増新田宿

原田呉服店へ注文

大正拾年三月十五日大中女獅子御水曳新調
一金拾七円八拾錢也 府下成増新田宿

原田呉服店へ注文

大正拾四年三月十八日

大正拾年三月十五日大中女獅子御水曳新調
一金拾七円八拾錢也 府下成増新田宿

大正拾年三月十五日大中女獅子御水曳新調
一金拾七円八拾錢也 府下成増新田宿

原田呉服店へ注文

大正拾四年三月十八日

右 役員

幹事 事

全 全

全 全

全 全

全 全

全 全

全 全

全 全

全 全

全 全

全 全

全 全

全 全

全 全

全 全

全 全

全 全

全 全

全 全

改

選

大正十五年三月

八日

舞

事

子

頭

笛

改

改

改

改

改

改

改

改

改

改

改

改

改

改

改

改

一金拾円也 大正十一年度ヨリ福田山ノ祝儀増額

一、獅子着用御袴一式 昭和五年三月十八日

一、全 单着服一式 府下赤塚村成増 原田安五郎君寄附

一、全 单着服一式 原田安五郎君寄附

○田 中 稲 壇 新 造

○田 中 吉 吉 田 吉 田

○田 中 倉 造 吉 吉 田

○田 中 欽 造 吉 吉 田

○田 中 幸 喜 幸 幸 田

○田 中 新 太 郎 新 太 郎

○田 中 幸 次 郎 幸 次 郎

○山 石 崎 德 右 七 郎 武

○山 石 田 岩 五 郎

○田 中 俊 三

○田 中 桂 二

○田 中 重 次 郎

○田 中 新 之 助

○田 中 俊 三

○田 中 俊 三

○田 中 俊 三

○田 中 俊 三

連中氏名続き

笛掛 大正十五年三月加入 ○田 中 桂 二

笛掛 大正拾二年三月加入 ○田 中 俊 三

笛掛 大正拾五年三月編入 ○田 中 俊 三

笛掛 昭和八年三月編入 ○田 中 俊 三

ヨリ懇篤ナル講話ノ折讚辞ニ預リ一同ノ光榮トナセリ
此ノ日天氣晴朗ニシテ午前九時成増駅ヲ発シ同十一時
一同神宮ニ参拝シ社前ニ於テ獅子舞ヲ行フ 終ツテ宮主
時正ニ午后三時ソレヨリ帰途ニ付ク 成増駅ニ下車スレ
バ当地有志ノ烈誠ナル歓迎ヲ受ケ大行列ヲナシテ氷川神
社ニ入り参拝後解散ス

笛掛 昭和三年三月加入 ○田中鉄藏
笛掛 昭和四年三月加入 ○田中彰一
笛掛 昭和四年三月加入 ○石田憲三
笛掛 昭和四年三月加入 ○山田安居郎

炊事掛 昭和十年三月ヨリ ○深井作藏
炊事掛 昭和十年三月ヨリ ○深井幾藏
炊事掛 昭和十年三月ヨリ ○深井幾藏

記

今回獅子神会舞子候補者物色難ノ為メ将来ニ継続覚束ナキニ因テ責任上一同幹事職ノ辞表ヲ提出ス

昭和拾壹年式月拾参日

幹事長 ○稻垣新七 ○田中莊造 ○田中幸三郎
田中政吉 吉田俊一 ○深井茂吉
○深井富次 ○吉田金五郎 ○田中平治
○石田萬次郎 吉田鍋太郎

獅子神会後見 田中純平殿

覚書

昭和拾壹年式月拾参日付ニテ獅子神会幹事職ノ辞表提出ニ依リ区内部長級並ニ獅子後見其他ノ先輩ト其ノ処置ニ付鳩首協議ノ結果時勢上誠ニ不得已ニ依リ是レヲ受理シ大字各区長ヲ訪問シ詳細ニ事情ヲ説明シ各區長ノ了解

得 獅子執行ヲ休止シ是レニ替ユルニ毎年三月十五日各区月番列席ニテ御神酒獻上ノ式ヲ挙ゲル事ニ決定ス
昭和拾壹年參月拾五日

獅子後見 田中純平
全 田中武平

獅子神会の記録は前記のように昭和拾壹年三月十五日の項で終つて居りますが、前後四十三年に及んだ獅子舞も舞子の後繼者難という根本的な大きな壁を破ることができないまま、遂に獅子舞の執行を休止し、御神酒獻上の式を挙行して、之にかえることとなつたことは本当に惜しんでも余りあることです。これも誠に止むを得ない事情とより他申しようがありません。

ただこれ程の行事故、私達は何等かの方法でこれを後に伝える手段を講じなければならないことを痛感して居ります。そのオ一步とも思い、前記のよう郷土資料展にささらし舞の用具一式を陳列し、町の皆様に御覧頂いたのであります。これにより町民各位のしし舞に対する関心がたかまことに地元の方々の願がはつきりして来たことは確と思われますので目下文化財委員会で、その実行方策について検討して居るので、皆様の御協力、御援助により一日も早く再現したいと希つて居ります。

祭ばやし

(埼玉芸能風土記による)

1 県内の概況

古くは祭といえば春と秋であつて、祭によつて民衆の生活が盛上つたのでありました。後に悪病、惡靈をふせぐ「祓」の信仰が盛んになつて来て、夏祭が行われるようになりました。

県内で七月十五日に祭ばやしを奏するところが五十箇所余りあるそうですが、その他の日（そのうちでは十五日が多い）を入れますとその何倍かの土地で祭ばやしが奏されて居るようです。

2 県内の主なばやし

(1) 上尾 天王様 「江戸ばやし」の流れをくみ「古ぼやし」「新ばやし」があります。

(2) 上尾 薬王寺 踊りを踊つてさえいれば楽しいといふいう高橋由藏という人が座元になつて始めたもので沖の上のはやしと呼ばれております。

(3) 春日部 大杉神社のはやしは、葛西系統のおはやしのほかに十曲余りの神楽と土地で「おどけ」と呼ぶ狂言めいた寸劇ものがあります。そのもとは享保年間（一七一六—一七三五）に茨城県稻敷郡阿波村の大杉神社を勧請し、神樂ばやしの伝授もその時う

けたものです。

(4) 川越 八雲神社 むかし川越藩主が志義町の山車を上覧のおり、中台の山田某の熱演に感心、その勇壮であざやかな舞いぶりを激賞されましたので、それ以来中台の上覧ばやしと呼ばれるようになりました。

神田ばやしの流れをくみ、改良を加えたものです。(5) 川越 古谷本郷の八幡神社 明治二十六年ごろまでは旧ばやしが行わられていました。その後目黒のはやし方の数えをうけ、種々工夫をつみました。流技は新町流に改良を加えたものであります。

(6) 川越 寺尾の日技神社のものは八十年前に伝来した金杉流などといわれています。一体に川越附近は徳川時代に江戸との交通が盛んだった関係で江戸ばやしが特に盛んなのであります。またはやしには、にぎやかな「てんつくばやし」と、静かな「座敷ばやし」とがあり、ここのはやしは後者で神田の静ばやしの流れをくむものであります。

(7) 入間郡吾野村 白ひげ神社 高麓部落から伝授したと伝えられていますが「古ばやし」の系統であり、「祇園ばやし」と呼んで居ります。

(8) 大和町白子 熊野神社の春祭に奏しますが、諏訪神社の例祭日にも奏します。「神田ばやし」の流れ

をくみ、他町村の祭や、お正月の悪魔祓いに招かれ
て奏します。附近に同系統のものが二、三あります。

- (9) 秩父 「屋台ばやし」「江戸ばやし」が横行して
いる県内で、特異性をほこる唯一の「祭ばやし」で
「馬鹿ばやし」とも呼ばれ、広く秩父盆地一帯に行
われています。

- (10) 所沢 神杉神社 所沢附近に多い重松流の一つで
「ちらし」といつて大太鼓、小太鼓、笛、かねの呼
吸があつた所で即興的に変つた手を作る変奏手法を
もつという特徴があります。

- (11) 飯能 諏訪八幡神社の祭の九月二十七日に各町内

から練出した山車が夜に入つて全部広小路に集ま
り、「ひきあわせ」のはやし競演を行うのでありま
す。町により旧ばやしと、新ばやしがあります。

3 大和町のはやし

県下のはやしの項にも概略を記しましたが、白子二区
に現存しているものは、

笛 並木金藏氏、

太鼓 新坂勝右エ門氏、柴崎詠三氏

の四氏によつてうけつがれております。神田ばやしの流
れをくんだ祭ばやしで現在は九代目にあたるそうです。
毎年熊野神社と諏訪神社の両社の祭に奏されて居ります

ので町民の皆さん耳にはなつかしくも親しみ深いもの
であります。四氏のご好意により昨年（昭和三十六
年）九月二十五日に笛と太鼓の音符を書取らせてもら
ましたので次にかゝげます。

（尚 同年十月三日の熊野神社の祭礼の終つた夜半近く
から特に依頼して録音を採らせていただいたものを
同年十一月三日と六日の町の文化祭の折、テープレ
コードーでお聞きいただきました。）

4 笛

(1) 屋 台

チャーヒーヤ チャーヒーヤ チヤヒチャヒ チヤ
ヒーヒヤラヒヤラリ チヤヒーヒーチリリチリイリ
ヒヤラ チーリヒヤラヒーリ ヒヤラヒーリ チー
リヒヤラ ヒヤラヒーリ ヒヤラ ヒヤラトロ
ヒヒヤラ ヒヤラトロ チーヒヤライトロ トロ
ヒヤロヒヤラ チーヒヤライトル トロヒヤロヒヤ
ラ チーヒヤライトル ヒヤラヒーリ チイリヒヤ
ラヒーリ チヤヒチーリ チイリヒヤラ チイリヒ
ヤライト オヒヤラヒヤラヒーリヒヤライト オヒ
ヤラ ヒヤラ オヒヤラ ヒヤラヒーリト オヒヤラ
ヒヤラ オヒヤラヒヤラヒーリヒヤル オヒヤラ
ヒヤライリーヒヤル チヒヤイートロ チヒヤイ

一トロ トーヒヤライートロ ヒヤラトヒヤリ

トーヒヤロヒヤーリ ヒヤラトヒヤリ

トーヒヤロヒヤーリ ヒヤラトヒヤリ

ヒヤロトヒヤ オヒヤリ ヒヤラトヒヤオヒヤリ

ヒヤール ヒヤール オーヒヤル オヒヤラヒヤラ

トロヒヤラ ヒヤラ チーヒヤラ ヒヤトヒヤ オ

ヒヤリ オヒヤラヒヤラトロ ヒヤロ ヒヤラ

(2) 屋台しやきり

チャヒーヒヤ チャヒーヒヤ チャヒチヤヒ チ

ヤヒーヒヤ チャヒ チャヒーヒヤ ヒヤヒ チヤ

ヒーヒヤラ ヒヤラリ チャヒーチリ チリイリヒ

ヤラ チイリヒヤラヒイリ ヒヤラヒイリ チイリ

イヒヤラ チイリイヒヤラ ヒヤヒイリ ヒヤラヒ

ヤラトロ オヒヤラ ヒヤラトロ チヒヤライト

ロ トロヒヤロヒヤラ チヒヤライトロ トロヒヤ

ロヒヤラ チヒヤライトロ ヒヤラヒイリ チイ

リ ヒヤラ ヒイリ チャヒイチリ チリリイヒヤ

ラ チイリ ヒヤラヒイリ

(3) 岡崎しやぎり

オヒヤラ ヒヤライート ヒヤラ ヒヤラ オヒ

ヤラ ヒヤライート ヒヤラヒヤラ

オヒヤラ ヒヤライ シヤライートロトウヘンヒ

5

(1) 打込み

テン テン テンツー テンツ テンツ テンツ

テンツ ステスクス— テケ スッテン テンス

ケ テン テン—

(2) 屋台

スッテン テンツク スッテン テンツク テン

ツク テンツク テンツク テレツク スッテン

テン スケテン テン— スッテン テン テン

ステスクス テケ スッテン テン スケテンテン

—スッテン テンヤ テテスクス— テケスツテ

ステスクス— テンツク スケテン

ヤラ チイリヒヤラ オヒヤラ ヒヤライ ヒヤラ

イートロ トウヘンヒヤラ チャヒーヒヤ チイリ

ヒヤラ ヒヤラヒリーイヒヤラ トロヒヤラ ヒイ

リーヒヤラヒイリ チイヒヤリヒヤリ チヤヒ

チャヒー ヒヤラヒヤラリー チャヒー チイリ

チリリイヒヤラチイリ ヒヤラヒイリ ヒヤラヒイ

リ チイリヒヤラ チイリヒヤラ ヒヤラヒイリイ

ヒヤラ ヒヤラトロ オヒヤラ ヒヤラトロ チ

ヤラトロ チャヒイヒヤ チヤヒ

ヒヤラ ヒヤラトロ ヒヤラトロ ヒヤラトロ ヒ

ヒヤラトロ チャヒイヒヤ チヤヒ

ステスクスー スケテン スケテン ステスクスー

スケテン スッテン スッテンテノー テケスツテ
 ノ テン スケテン テン

「くり返し」「くり返し」

テケ スッテン テン スケテン テン スッテ
 ノ テンヤ テテ スクス テケ スッテン テン
 スッテンテノー

屋台 しやぎり

(3)

テン テテ スクスー テテ テケ スクスー

テケスク スケテン ステスクスー スケ テン

テン テン テンテノー テン テン スッテン
 ノ スケテン テンテノー スッテン テン
 テン テン テンテノー テン テン スッテン
 ノ スケテン テンテノー スッテン テン
 テスクスー テケ スッテン テン スケテン
 ノースッテン テンヤ ステスクスー テケ
 ッテン ステスク テテスクスー テンツク スケ
 テンススクスー スケテン スケテン ステスク
 スー スッテン テン スケテン テン
 テンテノー テケ スッテン テン スケテン
 ノースクスー テケ スッテン テン スケテン
 ノースッテン テンヤ ステスクスー テケ
 ケスツテン テン スケテン テンテノー スッテン
 テン テン ステスケスー テケスツテン テン
 テンテノー スッテン テンヤ テテスケスー^ス
 テンテノー スッテン テンテノー スッテン
 テンテノー スッテン テンヤ テテスケスー^ス

スクスー テケ スッテン テン スッテン テン
 テン テテ スクスー テテ テケ スクスー

テケスク スケテン ステスクスー スケテン
 ノ テン テン テン テン テン スッテン
 ノ スケテン テンテノー スッテン テン
 テンススクスー スケテン スケテン ステスク
 スー スッテン テン スケテン テン

後記

町内に現存する無形文化財を何等かの形で、のこそうという努力の一端をここに示したのですが、一通り済んでみると、何か物足りないものを感じます。しかし、私達の現在の力ではこの程度でお許しいただくより他ありません。この仕事は町の文化財保護審議委員と専門調査委員によつてなされたものであります。主として鎌田良賢、小谷野信太郎、原田守、門田恭雄、本橋喬、富岡吾良、金子直亮の諸先生によつたものであります。

写真については西成田勝三氏、絵画については末井智敏先生のお力をおりいたしました。ここに稿を終るに当りその労を謝します。

は、たゞうつむいて、おもひをやめさせ

音をすり吸はせる。

せせせと、うるさい音がしてくると、おもひを

静か平のほほえみが成る。おもひは、この辺で静かに

うるさい音をうるさい音と見て、うるさい音が成る。おもひ

は、静かにうるさい音をうるさい音と見て、うるさい音が成る。

第1回 講習会

（1）

昭和三十七年七月一日 印刷発行

非売品

編集兼発行人 大金子直亮

板橋区上赤塚町九四

印刷所 高知堂小畠印刷所
大和町教育委員会

社会教育課



